

40人規模クラスにおける能動的な学習活動の実践報告

The Practical Report on Active Learning at 40 Students-sized Class

杉 田 律 子*

(平成28年1月20日受理)

要約

近年の大学教育においては「アクティブ・ラーニング」の導入が求められ、兵庫大学・兵庫大学短期大学部においてもFD委員会を中心に「アクティブ・ラーニング」の導入に関する研修会が開催されている。本稿は2015年9月30日に開催された「平成27年度アクティブ・ラーニングに関する研修会（第一回）」で発表したアクティブ・ラーニングを導入した実践報告をもとにして、短期大学部保育科40人規模のクラスにおける能動的な学習の実践例をまとめるものである。

キーワード：チーム基盤型学習、能動的学習、プレゼンテーション

keywords：Team-Based Learning (TBL), Active Learning, Presentation

1. はじめに

近年、大学教育においては能動的な学習の重要性や学習者主体の学びを重視する傾向にある。

平成20年度の「学士課程教育の構築に向けて」（中央教育審議会，2008）においては、学士課程共通の学習成果として、知識が体系的に理解されていることと同時に、コミュニケーションスキル・情報リテラシーなどの汎用的スキルや、チームワークへの指向性、市民としての責任などの意識・態度が育成されていることがあげられ（「学士力」）ている。

また、平成24年度の「新たな未来を気づくための大学教育の質的転換に向けて～障害学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」（中央教育審議会，2012）がまとめられ、「アクティブ・ラーニング（能動的学修）」をキーワードとして、大学教育の質的転換の重要性が提唱された。この答申の用語集によると「アクティブ・ラーニング」とは、教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称」である。このような一連の流れのなかで、教育の目標についてなど根本的

な問題とともに、教室の設備やe-ラーニングシステム、タブレットを活用した学習などハード面の「わかりやすい」部分での改善が求められてきている。

図1はNational Training Laboratoriesの研究をもとにして高知県須崎市教育委員会が作成した学習の定着率を表した図であるが、教授者が口頭で講義を行う「レクチャー」の学習定着率5%など従来型の受動的な学習の定着率が低いのに対して、集団で討論する「ディスカッション・グループ」方式の学習定着率が50%、学習者の「体験学習（PBD）」が75%などと、より能動的な学習が学習の定着には効果的であることはよく知られている。

また、中教審が「アクティブ・ラーニング」で「学習」ではなく「学修」という用語を使っているのは、大学の場合、「アクティブ・ラーニング」を実現するためには、1時間の授業に対して倍以上の時間の予習・復習を自分ですることが単位取得には必要となり、なおかつ予習・復習を自ら行う能動的な姿勢を求めているからである。また、グループ討論やディベートを実施するには予備知識

（*すぎたりつこ 保育科講師 特別支援教育学）

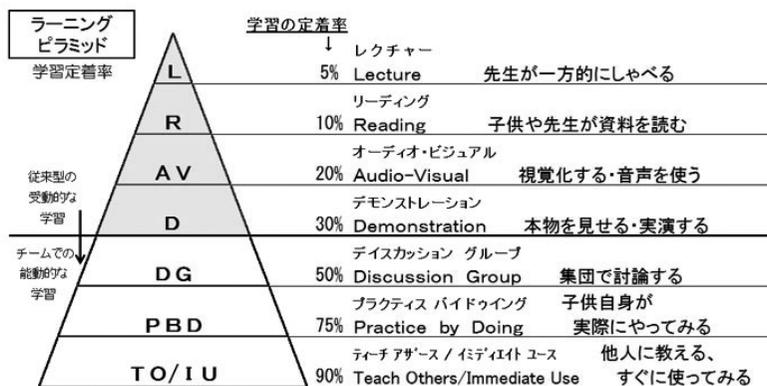


図1 学習の定着率（高知県須崎市教育委員会HPより）

が必要であるだけでなく、調査等にも文献を読む力や、校外でフィールドワークを実施する観察力や記録する力が必要になるため、「アクティブ・ラーニング」を導入するには学生のリテラシーの質と学びへの意欲の向上が不可欠となる。

しかしながら、近年の大学教育においては質と意欲に問題を抱えている学生が増加しているのが現実である。本学においても、アクティブ・ラーニングを勧める校内研修を開催する取り組みを行ったり、「アクティブ・ラーニング・ゾーン」の整備が行ったりと、「アクティブ・ラーニング」を目指した学習環境を整えつつある。しかしながら、いくら「アクティブ・ラーニング・ゾーン」のようなハード面を改善したとしても学習者の取り組みが変容するとは限らない。そのため、教員個々人が科目の目的や到達目標に合わせ、また受講者の資質や意欲に適した授業のあり方を、授業形態や履修の条件、授業の進め方などを工夫して行っているところである。

本稿では、「アクティブ・ラーニング」の訳として中教審の答申の「学修」を使用せずに、「学習」を使用しているが、これは本学短期大学部保育科の教育課程ならびに学生の質と意欲を考慮して、学生が学修活動を行える状況にはないと判断することから、今後は「アクティブ・ラーニング」を能動的な学習として記述する。

能動的な学習の導入には、教材・教具、設備などの物質的な面を充実させるとともに、1人の授

業者が担当する学生数の制限など人的な面も充実させる必要があるが、本学短期大学部においては、設備面、人的な面においても十分といえる環境ではないが、「アクティブ・ラーニング・ゾーン」を使用した活動例として実践報告を行うものである。

2. 学習の取り組み

今回、能動的な学習活動を実施した科目は、保育科第三部3年生対象の保育士資格必修科目「障害児保育B」である。筆者は保育科第三部3年生2クラスの「障害児保育B」を2014年度から担当しており、担当1年目の2014年度よりチーム基盤型の能動的な学習の取り組みを行っている。担当の2クラスは、双方とも40人規模のクラスであり、半期15回の講義のうち、後半部分の講義について、1クラスを6、7人ずつ6つのグループに分けてチーム基盤型の能動的な学習の取り組みを導入している。2015年度は2014年度の反省を踏まえ、より受講者が能動的に学習に取り組むことができるよう講義計画を立てた。

「障害児保育B」の講義目的は、保育者が障害児支援を行うために最低限必要な知識と心構えを身に着けることであり、その目的を達成するために、個々人の学習だけではなく、クラス内に6、7人のグループ編成を行い、1つのチームでテーマを設定し、協力して学習を行うというチーム基盤型の能動的な学習を取り入れた。グループ活動

を通して互いに協力し合うことにより、リテラシーの向上とともに共同して学習活動を行う力を培うこと、自らの考えをチームのメンバーに表現する力を向上させること、そしてさらに、その成果をプレゼンテーションすることによって他者に伝える力を向上させることを目指している。

受講者は保育科第三部AクラスおよびBクラスの2つのクラスである。2クラスとも40人規模のクラスであり、それぞれのクラスは同日の1時限目と2時限目に開講されている。2015年度の履修者は、1時限目のBクラスが男子1名、女子38名の合計39名が受講、2時限目のAクラスが再履修者1名を含む女子38名が受講している。半期15回の講義のうち、前半6回を授業者による教授から成る知識や問題意識を育てることを目的とした講義を行い、次の4回を共同的な活動を行う力を培うことを目指したチーム基盤型の能動的な学習、その後の2回をチームで学習した成果を他者へと伝え、表現する力を培うことを目標としたプレゼンテーション・ソフトを活用したプレゼンテーションの発表会に充てた。このグループ活動は、グループで意見を出し合って、今まで学習してきた障害に関する問題をテーマに選び、文献調査を行い、研究を行った結果をプレゼンテーションするという活動である。

(1) 講義1～6回（教授者主導型）

講義1～6回については、通常の講義室を用いた、クラス全体による教授者主導型の講義を行った。

講義1回目に今までの学習において学習している障害について知識に関する簡単なまとめのレポート課題を行った。この課題の作成により、最終学年の最後の半期の学習の仕上げである、という意識を持たせることを意図している。

2014年度の学習の取り組みでは、各グループが1つの障害をテーマに選んでグループ学習に取り組んだものの、文献をまとめるにとどまったグループが続出したことを反省し、今年度は受講者がより問題意識をもって学習に取り組めるように配慮した。前後の講義の中で障害児支援の実践を

表1 障害児保育Bの講義計画

	講義の内容
1	障害児保育の理念／今までの学習の振り返り課題の作成
2	障害児保育の現状①保育・教育の取り組み
3	障害児保育の現状②保育現場の取り組み／レポート作成
4	障害児保育の現状③福祉機関の取り組み
5	障害児保育の現状④医療機関の取り組み
6	障害児保育の現状⑤医療（出生前診断と生命倫理）
7	グループ活動
8	グループ活動
9	グループ活動
10	グループ活動
11	グループ活動
12	グループ活動（発表会）
13	グループ活動（発表会）
14	グループ活動のまとめ
15	学習のまとめ

まとめたVTRの視聴を多く取り入れたり、新聞記事を活用した出生前診断と生命倫理に関わる問題提起を行ったりして、受講者が障害児保育の現場が抱える問題に興味をも持ちやすいように配慮を行った。

また、講義3回目にレポート課題を各自に与え、各自が興味のある障害についての概要や基本的な支援の方法についてまとめさせた。レポートの内容は、その障害に興味を持ったきっかけ、障害の概要、支援方法、保育所・幼稚園で予想される配慮であり、その後のグループ活動で調べるべき事柄について、事前に自分なりにまとめておく方法について学習することを目的としている。その際、テーマ設定の理由や保育所・幼稚園での配慮の方法などについて重点的に記載させ、教科書を引用しただけのレポートではなく、自分自身の考えが反映したレポート作成につながるように配慮を行った。

(2) 講義7～11回

(チーム基盤型学習；スライド作成)

グループ活動はアクティブ・ラーニング・ゾーンで行った。アクティブ・ラーニング・ゾーンでは、PCの小さな画面だけではなく、大画面にPCの画面が映し出されるため、グループ全員が画面を見ながら操作ができることで、活動から外れようとする学生を減らすことができるという効果があった。

受講者はコンピュータ演習を履修しているため、プレゼンテーション・ソフトの技術は習得済みであり、また、各グループの中にPCの技術が高い受講者が数名はいるため、その学生を中心としてスライド作成を行っていた。

また、授業者が各グループのテーブルを巡回する中、チームを主導する学生を中心にして、グループの話し合いの方向性や文献検索の手法やまとめ方の助言を行った。毎回の講義の最後に作成したスライドを印刷して提出させ、その添削を行った。次の講義時に提出物の返却を行うのであるが、その際、グループの進捗状況を確認しつつ、適宜、その日の活動の助言を行った。

2015年度の各グループのテーマ設定と研究方法は表2の通りである。2クラス合計12グループの

中で、文献研究のみにとどまったのは2グループのみであり、アンケート調査が4グループ、聞き取り調査が1グループ、何らかの教材研究に取り組んだグループが5グループであった。

各グループともテーマ設定、スライドづくりには苦戦をしていたが、2014年度はほとんどのグループが文献研究だけにとどまってしまっていたのに比べ、今年度は講義計画の前半により問題意識を持ちやすい講義内容を心掛けたことに加え、スライド作成の手引き配布したことも効果的であったと考える。配布したスライド作成の手引きは、①テーマ設定の理由、②研究の目的、③研究の方法、④結果、⑤考察、⑥今後の課題という一連の流れに沿ってスライド作成をすることを明示したものである。

また、今年度は毎時間ごとに、スライドを印刷し提出させたもの添削して返却することを繰り返したため、スライドづくりの体裁を整えることができ、また論理的に表現する練習となった。以下に、1つのグループのスライドの一例を示す。

表2 各グループのテーマ設定と研究方法一覧

	グループ	テーマ	研究方法
1 時 限 目	1	自閉症スペクトラム	文献研究
	2	視覚障害	文献研究
	3	出生前診断	アンケート調査
	4	ダウン症候群	教材研究（コミュニケーション・カード）
	5	聴覚障害	聞き取り調査
	6	自閉症スペクトラム	教材研究（集団保育時の絵カード）
2 時 限 目	1	ダウン症候群	アンケート調査
	2	自閉症スペクトラム	教材研究（園だより）
	3	ADHD	教材研究（啓蒙用プレゼンテーション）
	4	知的障害	教材研究（啓蒙用プレゼンテーション）
	5	サヴァン症候群	アンケート調査
	6	自閉症スペクトラム	アンケート調査

ダウン症について

1班

スライド1

はじめに

実習先でダウン症の子どもがいた。

現代社会では、晩婚化による高齢出産でダウン症の子どもたちが保育園で見られるようになってきた。それに伴いテレビや新聞などでダウン症に対することが多く報道されているが、一般の人たちはダウン症に対してどこまで知識があるのかを知りたくて調べてみようと思った。

スライド2

ダウン症の定義

ダウン症とは21番目の染色体が3本ある染色体異常による、生まれつきの精神疾患発達の遅れや特有の顔立ちなどの特徴がある。

合併症を引き起こす可能性もある。

スライド3

ダウン症の由来

身体的特徴から由来している。かつて平たい顔や斜めに吊り上がった目などの外観上の特徴のある「蒙古人」からとって蒙古症と名付けられた。

現代では、ダウン博士にちなみダウン症と呼ばれている。

- Xn-gck8b9hu04j8m3b5mm.jp

スライド4

ダウン症の代表的特徴

身体の発達や精神の発達が遅れている。

特有の形をして生まれてくる。

感染症への抵抗力が通常よりも弱いため病気にかかりやすい。

スライド5

身体的特徴

1. 鼻が低く耳が顔の少し低い位置についている
2. 小指の関節が1本少ない
3. 足が短く、親指と人差し指の間が広い
4. 体が柔らかい
5. 首の後ろの肉付きが良い

<http://choji.jp/archives/147>

スライド6

精神的特徴

1. コミュニケーションをとる際に行き違いが生じやすい
2. 聞くことが苦手
3. 感受性が豊か
4. 何事もすぐ行動に移す

<http://www.barbaraginagarrett.com/downsyndrome>

スライド7

ダウン症の検査項目

	羊水検査	血清マーカー検査(クアトロ検査)	臍帯検査	超音波検査	新生児出生前診断(35歳以上)
検査内容	羊水を採取し疾患の有無を確かめる検査	血液採取から染色体異常の検査	子宮に針を刺し臍帯を採取する検査	胎嚢にエコーを当て大まかな胎児の異常を検査	血液を採取(DNA(染色体)以上)の検査
検査精度	99%	ダウン症: 96.4%, 18トリソミー: 79.5%	99%	99%	99%
検査期間	妊娠15週~18週	妊娠15週~21週	妊娠9週~14週	妊娠10週~15週	妊娠10週~18週
検査リスク	一般的であるが流産の恐れがある	羊水検査と比べて手頃	羊水検査同様流産の恐れがある	なし	なし
判明する疾患	ダウン症候群(21トリソミー) エドワード症候群(18トリソミー) 13トリソミー	21トリソミー、18トリソミー	21トリソミー、18トリソミー	脳、腎臓、心臓、四肢の異常、21トリソミー	21トリソミー、13トリソミー

スライド8

母親の出産年齢ごとのダウン症の確率

母親の年齢 (歳)	ダウン症のリスク	染色体異常のリスク
20	1/1,667	1/526
25	1/1,250	1/476
30	1/952	1/385
35	1/376	1/192
40	1/106	1/66
41	1/82	1/53
42	1/63	1/42
43	1/49	1/33
44	1/38	1/26
45	1/30	1/21
46	1/23	1/16
47	1/18	1/13
48	1/14	1/10
49	1/11	1/8

Source: Maternal Fetal Medicine: Practice and Principles, Creasy and Rouse, eds., W.B. Saunders, Philadelphia, PA, 1995:71. Reproduced with permission.

スライド9

療育施設

- 療育とは、障害児を医療的に育成することである。障害児の成長や自立支援のための、医療、治療、育成、保育、教育が「療育」である。
- 療育施設では、作業療法士や医師の指導で療育を受けることができる。

スライド10

療育施設

- ダウン症の子どもは療育施設に週に1~2回通いながら、施設と家庭が連携し、ある程度自分ですることができるようにする。
 - 自分のできることが増えてきたら保育所や幼稚園に通う。
- 引用療育とは？発達障害・知的障害の特徴をチェック 2015年11月11日
<http://shogai.web.fc2.com/support/sup001.html>

スライド11

ダウン症の保育

1. 子どもの心に寄り添って共感する。
2. 達成感をたくさん味わえるような保育を大切にする。
3. 意欲がもてる声かけをする。
4. 子どもの行動を褒め自信をもてるようにする。

スライド12

日本人のダウン症の有名な人

- 金澤 翔子さん:書道家 高井 萌生さん:俳優
 越智 章仁さん:ピアニスト 中村 順二さん:画家
 川田 大志さん:写真家 新倉 壮朗さん:ミュージシャン

スライド13

研究目的

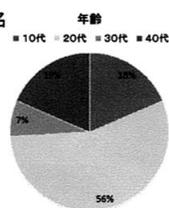
一般の方がダウン症について知識がどこまで理解されているのかを明らかにするためにアンケート調査などを行い実態把握。

スライド14

アンケート調査の結果

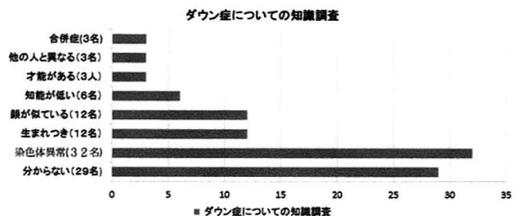
計31名に配布し、回答人数は31名
 回収率は100%

1. 対象者の年齢:10代 5名
 20代 15名
 30代 2名
 40代 5名



スライド15

2 ダウン症について知っていること



スライド16

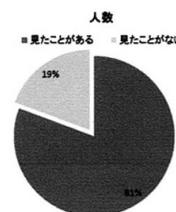
分析

10代は障害者という枠でしかダウン症を見ていないが、20代から40代は「優れた才能を持っている」と答えた人が多かった。
30代から40代は子育て経験があるため「育児が大変」と答える人も多い。

スライド17

3 ダウン症の子どもを見たことがあるか

見かけたことがある: 25名
見かけたことがない: 6名



スライド18

4 ダウン症に対する印象

特にない(5名)、分からない(2名)、障害者(3名)、生活に不自由なことがある(3名)、顔に特徴がある(8名)、人なつこくてかわいい、まじめ、前向き、特技が優れている、穏やかな性格の人が多く、人の感情を読み取ることが得意な印象を持っている、それぞれ個性がある、才能がある子が多い(6名)、みんなと一緒に行動をすることが難しいことがたまたまある、あまり背が高くない、育児が大変(3名)、良く人を見てしっかりと聞いている、あまりいい印象はない、成長が遅い、社会的に差別がある、人による、本人が辛そう

スライド19

5 クラスにダウン症の人はいたか

いない: 30名
無標: 1名



スライド20

考察

- ▶全体を通して、ダウン症について知らない人が多かったのは社会的にあまり関心が向けられてこなかったことも背景の一つであると感じた。
- ▶意見の中にもあったようにまだ社会的に低く見られ、差別が残っている現状が見られた。
- ▶アンケート結果から、障害に対しての考え方が異なっていた。

スライド21

今後の課題

- ✓今後の課題として、知らなかったことは一般の人たちが障害に対しての印象やダウン症の保育について、ダウン症の検査項目や出生年齢ごとのダウン症の確立など、私たち自身調べるまで知らなかったことも多かったのを機に更に知識を深めたい。
- ✓将来保育士として働いている時に、ダウン症の子どもを受け持つ可能性はある。クラスの子どもたちが障害に対して偏見を持たず仲良く生活ができるように保育をし、保護者の方々や地域の方々にもダウン症について理解をしてもらい、障害に関係なく家族が楽しく毎日を送っていただけるようにしていくことを課題としていきたい。

スライド22

参考・引用文献

ダウン症とは ふみみえる famiyell.net
2015年11月11日 <http://mihama-w3.n.fukusi.ac.jp/circle/d-sports/syougai/4-2-5.htm>
ダウン症検査の最新事情—NAVERまとめ 2015年11月11日
<http://matome.naver.jp>
ダウン症の有名人—寛斎龍人で家族がダウン症の方とため
2015年11月11日
<http://down-and-up.com/otherdowninfo/down-yuumei-ichiran/>

スライド23

参考・引用文献

話題の窓NET 2015年11月11日
<http://happy-life1192.jp.net/311.html>
年齢別のダウン症確率を紹介 妊婦力2015年11月18日
www.meg0405.com/dawnshow-899
<http://sanjuntunokisitu.jp/statistics> コンカワノコ
http://acceptions.org/?page_id=566 NPO法人アクセプションズ
http://futabanokai.com/free_news/news070601.html ふたばの会ニュース
<http://jikei.health-ask.net/ways-of-coping/stereotypy/> 自閉症ガイド

スライド24

(3) 講義12~13回

(チーム基盤型学習；プレゼンテーション)

各グループの発表は2週に分けて実施し、1週につき3グループが発表を行った。10分以内の発表とし、その後、10分程度の質疑応答を行った。また、自分のグループ以外の発表については、図2のプレゼンテーション評価シートに評価を記入させるようにした。評価の基準は①発表態度の良さ②スライドの見やすさ③発表内容の高さの3点であり、その総合評価を5段階で記入するように設定し、発表の質だけではなく、聞き手に伝えようとする態度や表現力に留意するように促した。

また、各グループの発表前には必ず一人ひとり

氏名を名乗り、グループで声を合わせて「よろしくお願いたします。」とあいさつをしてから発表を始め、質疑応答後は「ありがとうございました。」とあいさつをしてから発表を終えることを徹底した。これらのマナーを徹底することにより、プレゼンテーション評価シートの発表態度の良さの項目についての自分なりの評価基準を持てるように配慮を行った。以下の4名の学生のプレゼンテーション評価シートを見る限り、自分なりの評価の観点に基づき真摯な態度で評価を行っていた様子である。スライドの見やすさについては、イラストやアニメーションの動きがあるグループの評価が高い傾向にあった。そして、発表

第三部3年生「障害児保育B」プレゼンテーション評価シート

1班 ()

	高					低	コメント
発表態度の良さ	5	4	3	2	1		
スライドの見やすさ	5	4	3	2	1		
発表内容の高さ	5	4	3	2	1		
総合評価	5	4	3	2	1		
よくわかった所							
もっと詳しく知りたい所							
関心を持ったことなど、何か一言							

図2 プレゼンテーション評価シート

	高					低	コメント
発表態度の良さ	5	4	③	2	1	発表してない人もいた。	
スライドの見やすさ	5	4	③	2	1	サンプルは見やすい。	
発表内容の高さ	5	④	3	2	1	喋るのが早くて聞きにくい。	
総合評価	5	④	3	2	1	発表が長過ぎてしどくなかった。もう少しおもしろい発表してほしい。	
よくわかった所	高出生率になると障害の確率が増える。						
もっと詳しく知りたい所	どれぐらい肉付きがいいのか知りたい。						
関心を持ったことなど、何か一言	身体的特徴の首の後ろの肉付きがいいなど 知らなかったのに関心を持った。						

評価シート1

	高			低	コメント	
発表態度の良さ	5	4	3	2	1	マスクを取って発表をしたほうが聞きやすいです。
スライドの見やすさ	5	4	3	2	1	文字ばかりで、見ていと疲れてきます。
発表内容の高さ	5	4	3	2	1	具体例がなく、あまり理解出来たかもこちら側も不明。
総合評価	5	4	3	2	1	図も数字ばかりで、あまり分からなかった。
よくわかった所	保育現場の中で、クラスの中で、偏見を持たないよう 図や絵が調べたことをとても良かったと思います。					
もっと詳しく知りたい所	前半の発表で(色紙の)あれはもう少し理解が深められたと思 います。また、保育の中で、ダウン症の子をもっと受け止め、自信につなげられるようにし					
関心を持ったこと など、何か一言	「ダウン症のに対する印象」の所も、自分達で、図を使えば、 もう少し理解が深められたと思う					

評価シート2

	高			低	コメント	
発表態度の良さ	5	4	3	2	1	全員で分担して読んでも良かったと思えました。
スライドの見やすさ	5	4	3	2	1	文字が少し小さくて見にくい所がありました。
発表内容の高さ	5	4	3	2	1	とてもダウン症について詳しく調べていると思いました。
総合評価	5	4	3	2	1	ダウン症について深く知ることができました。
よくわかった所	ダウン症の由来やダウン症の身体的特徴、高齢出産でダウン症の子どもが生まれる確率 が高まることなどがわかりました。					
もっと詳しく知りたい所	具体的な事例があったらもっとわかりやすいと思えました。 アンケート調査をした対象者は理解のある人が多かったのかな、と思えました。もっと多くの様の人からアンケ ットをしたら結果が変わっていたかもしないです、それについて知りたいと思えます。					
関心を持ったこと など、何か一言	ダウン症は高齢出産の方が生まれる確率が高くなるということをより詳しく 知ることができました。					

評価シート3

	高			低	コメント	
発表態度の良さ	5	4	3	2	1	話して、子ども以外に静かで聞きやすかったです。
スライドの見やすさ	5	4	3	2	1	シートが統一されて、子供が表が小さくみえにくかった。
発表内容の高さ	5	4	3	2	1	ダウン症についてまとまらなくて、アンケートもあり、一般の人の考えはわか りませんでした。
総合評価	5	4	3	2	1	良かったり、面白い内容でした。
よくわかった所	ダウン症についてよくわかった。 (症状、特徴、ゆえに、保育の仕方)					
もっと詳しく知りたい所	ダウン症に対する支援の仕方をもっと詳しく。 有名人が何をしているのか。					
関心を持ったこと など、何か一言	もっと一般の人に対してアンケート調査をしてどう思っているのか、知りたいと思 いました。ダウン症について					

評価シート4

内容の高さについては、評価が二分するものがあった。先に挙げたスライド1～22のグループの発表については、4や5点など高い評価を付けている受講者が多い一方比較的低い3という評価の学生も多かった。

(4) 講義14～15回（学習のまとめ）

チーム型基盤型学習活動が終了した後、講義14回目にはグループで研究発表したスライドを、各個人でレポートにまとめなおす作業を行った。グループではプレゼンテーション・ソフトを使用してスライド作成を行い、グループごとに結果をまとめ、考察を行ったが、その発表を各個人がレポート形式に直して、自分なりの考察を行うといった活動である。また、講義15回目には筆記試験を行い、障害者支援に関わる基本的な知識の確認を行った。

3. 考察

今回の実践は、受講者が様々な障害者問題から自らの興味関心のあるテーマを設定をして、文献研究やアンケート調査または教材研究などを行い、プレゼンテーションを行うという試みである。この実践の結果、スライド作成やグループ発表という目新しい活動に興味を持ち、ある程度は受講者が能動的に学習に取り組むことができ、一定の成果が上がったが、各グループの文献研究のほとんどがネット検索に終始してしまったり、障害の理解が中途半端な段階にとどまっていたり、とまだまだ不完全なものではあった。さらに質の高い学習にしていくためには、学生のリテラシーの質と意欲の底上げが必要である。また、2クラス合計12グループの指導を1人の授業者が行うしかない現状では、学生への指導が十分にできているとは言えない。

しかしながら、授業者の計画と配慮、または学生が課題をこなしているのかを詳細に確認しながら講義を実施し続ける中で、当初は課題をこなすために「学習させられている」状態から、居残ってスライド作成したり、図書館に文献を探しに行ったり、アンケートの集計を懸命に行ったり、

と能動的に学習しようとするグループが一定数出現してきたことは1つの成果であると言える。

また、本稿ではプレゼンテーション評価シートの詳細な分析ができていないが、発表態度やスライドの見やすさの評価についてはあまり個人差が見当たらなかったが、研究の質に対する評価には受講者によってばらつきが見受けられた。評価シートの内容と受講者の学生の学習成果とを比較すると、研究の質の評価には聞き手側の学生の力の差が関係しているのではないかと予測される。今後は、プレゼンテーション評価シートの分析を行って、学生の個人差についての検討を行い、今後の学習支援に役立てていきたいと考える。

参考・引用文献

- 橋本信子 2013 能動的学習を促すための知的交流の場を作る取り組み 大阪商業大学論集 第9巻第2号（通号170号）
- 高知県須崎市教育委員会『須崎市キャリア教育通信第5号』（<http://www.kochinet.ed.jp/susaki-l/caritsu005.pdf> 検索日2016年2月4日）
- 中越元子ら 2014 チーム型基盤型学習（TBL）と問題基盤型学習（PBL）を統合した授業「プレゼンテーション」の実践
- 杉田律子 2015 保育科40人規模クラスにおける能動的な学習活動の実践例 平成27年度アクティブ・ラーニングに関する研修会（第一回）資料4